

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 18 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381028

研究課題名(和文) 生の実践知 を継承する技法に関する歴史的・教育人類学的研究 日韓の比較を通して

研究課題名(英文) The Historical and Anthropological-educational Study on the Arts to Transmit 'Practical Wisdom for Life (Sei no Jissenchi)' to the Next Generation

研究代表者

岡部 美香 (Okabe, Mika)

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号：80294776

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、生の実践知 を次世代に継承する諸技法について、人間の成長と成熟に及ぼす作用および教育実践上の意味と有効性を具体的に解明することを試みた。その結果、生の実践知 の継承に際して活用される多種多様な技法は、総じて、他者と共に生きる世界を境界づけ、秩序づけるのに資するものであり、モノを媒介としたり例や比喻、寓話やアナロジーを用いたりなど、合理的で実証科学的な知の体系には回収し得ないという特徴をもつことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this study, we focused on strategies used to transmit practical wisdom for life (Japanese: Sei no Jissenchi) to the next generation. Specifically, we attempted to elucidate the role these strategies play in human growth, development, and maturation, as well as the significance and effectiveness they hold in relation to teaching practice. As a result of this study, we identified two general attributes among the diverse range of strategies used to transmit practical wisdom for life to the next generation: (1) they contribute to the drawing of boundaries and the ordering of the world in which one lives with others in a community or a society, and (2) they do not fall into rational and empirical systems of knowledge, because they involve the use of objects as educational media with body performances, and also because they use examples, metaphors, allegories, and analogies.

研究分野：教育学

キーワード：教育人間学 歴史的・教育人類学 実践知 世代継承 教育の技法 モノ 例示 アナロジー

1. 研究開始当初の背景

(1)国内外の研究動向と位置づけ

「実践知」は、卓越した大学院拠点形成支援国際フォーラム「実践知と教育研究の未来」(2013年3月・京都大学)が開催されるなど、国内外の教育学研究において近年、注目を集めている。なかでも生命・人生・生活といった「生(Life)」にかかわる実践知は、日常生活を実際に送るなかで身体の動きを伴う実践を通して身につけられ活用されるという特徴をもつ。これが東洋の教育的伝統を特徴づけるものであることは、国際教育哲学会議(2010年6月・ソウル国立大学)などで指摘されている。そこでは、生の実践知に焦点づけた東洋の伝統に潜在する教育(学)的可能性の解明が今後の教育学研究における重要な課題であることも提起されている。

他方、日本の教育哲学・教育思想史の領域では、先行世代と後続世代の世代継承関係が、19世紀末～20世紀初頭以来、ドイツやアメリカを中心とする西洋の先行研究に学びつつ研究されてきた。だが、2000年代に入って以降は、世代間の継承行為を媒介するもの、すなわち世代継承のメディアに関する考察が不十分であることが指摘されている。

ここでいうメディア(中間にあるもの・媒介するもの)とは、継承される文化内容および継承の際に用いられる道具や方法をさす。教育哲学・教育思想史の領域におけるメディア研究は、20世紀後半以降、日本では、日本女子大学の今井康雄氏によって先導的に推進され、ドイツでは、ベルリン自由大学のCh. Wulf氏を中心とする歴史的人間学の研究グループによって盛んに行われている。しかしながら、日本の先行研究は、概して研究対象が言語メディア(ことば・文字・書物)に集中しており、ドイツをはじめとする西洋諸国の先行研究では、東洋に特有のメディアが注目されることはほとんどない。

(2)着想に至った経緯

研究代表者の岡部は、研究分担者の森(高松)らとともに、これまでも生の実践知の世代継承過程について研究してきた。従来の研究を通して明らかになったのは、次の三点である。

生の実践知の世代継承に際して、東洋の伝統においては、ことば・文字以外の多様なメディアが活用されている。

ことば・文字以外のメディアは、先行世代の身体の動きと連動する「技法(art)」として後続世代に提示されて初めて教育的機能を発揮する。

「技法」は、先行世代にとっては、自分の意図を後続世代に伝達し、後続世代の身体の動きを規制するという機能を果たす。他方、後続世代においては、言語による思考の規制をあまり伴わないことによって、文化内容の意味解釈の自由と自

律を保証するという機能を果たす。

「先行世代による規制」と「後続世代における自由と自律」がズレを引き起こすというメディア一般の構造原理は、すでに先述の今井氏が指摘している。だが、そこではメディアは、先行世代の身体の動きと連動しつつ後続世代に提示される技法としては捉えられていない。また、メディア一般の構造原理が、ことば・文字以外の技法のそれぞれにおいても実際にいかに作用しているのかについても分析されていない。そのため、東洋の教育的伝統の特徴といわれる生の実践知の世代継承過程については、その教育(学)的可能性がまだ十分には解明されていない。

2. 研究の目的

1で述べた国内外の背景とこれまでの研究成果に基づき、本研究は次の点の解明を目的とすることにした。

「先行世代による規制」と「後続世代における自由と自律」がズレを引き起こすというメディア一般の構造原理が、生の実践知を次世代に継承する諸技法において実際にいかに作用しているのかを具体的に明らかにする。その際、諸技法を1)音・声、2)色・形(平面・立体)、3)空間構成の3つに類型化し、それぞれについて、人間の成長と成熟に及ぼす作用および教育実践上の意味と有効性を解明する。

ことば・文字以外のメディアに着目した教育学研究は、日本ではまだ少ない。本研究は、これに取り組むことによって、文書や書物にあまり書き残されることのない一般的な人びとの日常的な世代継承行為とそこに息づく生の実践知を教育学の議論の俎上に載せることを試みた。

3. 研究の方法

本研究では、これまでの研究のなかですでに一定の有効性が確認されている次の方法を用いた。すなわち、ベルリン自由大学のCh. Wulf氏が提唱する歴史的教育人間学の手法に倣い、比較思想研究とフィールド調査研究(参与観察・インタビュー調査)とを組み合わせた研究方法を用いた。

具体的には、まず、東西の比較思想研究を通して、生の実践知を次世代に継承する諸技法それぞれについて、人間の成長・成熟と生成変容に及ぼす作用および教育実践上の意味と有効性を解明し、次に、比較思想研究の成果を、日本と韓国におけるフィールド調査研究(参与観察・インタビュー調査)を通して、臨床的に検証し、より明確化することにした。

フィールド調査研究では、東洋の伝統的な世代継承行為が端的に現れる日本と韓国の

葬儀・法要に焦点を当てた。そこで用いられる諸技法を 1) 音・声、2) 色・形(平面・立体) 3) 空間構成 に類型化し、これらと西洋近代の世代継承の典型である学校教育の技法(ことば・文字)とを比較検討した。さらに、本研究では、ことば・文字以外のさまざまな技法に着目することから、文化人類学・民俗学との学際的な対話を積極的に取り入れることにした。

4. 研究成果

(1)26 年度

研究期間の初年度にあたる 26 年度は、比較思想研究と フィールド調査研究を次のように進めた。

比較思想研究

日本の世代継承にかかわる文献、韓国の世代継承にかかわる文献、西洋の世代継承にかかわる文献についてそれぞれ考察・分析を進めつつ、三者を比較する視点についてグループ全体で協議した。協議の結果、ことば・文字以外の世代継承の諸技法においては、多くの場合、先行世代と後続世代の意味解釈にズレが生じ得ることが前提として織り込み済みであることを確認した。ズレることそのものの人間学的意味、人間形成的意味を明らかにするべく、J. デリダの引用論、H.-G. ガダマーの解釈学、P. アドや酒井直樹の翻訳論などを共通のテキストとしながら、それぞれの文献の考察・分析および比較分析をさらに進めることにした。

フィールド調査研究

27 年度に本格的に実施する日本におけるフィールド調査研究(兵庫県豊岡市の地蔵盆)および韓国におけるフィールド調査研究(韓国・公州におけるチェサとチャレ)の準備を行った(現地の協力者との打ち合わせなど)。

(2)27 年度

27 年度は、フィールド調査研究を中心に進めた。まず、8 月に、兵庫県豊岡市でフィールド調査研究を実施した。主題は、参与観察とインタビュー調査による、地蔵盆の技法をめぐる世代継承の実態である。次に、9 月に韓国・公州でフィールド調査研究を実施した。主題は、参与観察とインタビュー調査による、チェサとチャレの技法をめぐる世代継承の実態である。

この2つのフィールド調査研究の結果について考察・分析しつつ、26 年度から継続している比較思想研究も進めた。

(3)28 年度

最終年度である 28 年度は、26 年度・27 年度に実施した比較思想研究の考察・分析とフィールド調査研究の結果とその分析とを総合的に検討した。検討の結果、明らかになったのは次の二点である。

世代間で 生の実践知 を継承するに際して、東洋においては、西洋と比較すると、ことば・文字以外のモノを媒介とする多種多様なメディアが駆使されている。これらのメディアは、生(者)/死(者)など、人が生きる上で区別ないしは差異化すべきとされるものごとを弁別し、他者と共に生きる世界を秩序づけるという機能を有している。他方ではまた、その弁別が曖昧になる境界が必ず存在していることや、生の実相においてはすべてが一連の流れとして繋がっており関係づけられていることをも同時に示唆するものであった。これらはすべて、人が他者と共に生きる世界を構築し、必要ならば内破し生成することにかかわる技法であり、さらに、これらの技法は、言語による知的操作ではなく、身をもって経験させるという点に特徴をもっている。ひるがえって、ことば・文字による伝達・伝承を世代継承の主流とする西洋においても、例示や比喻、寓話やアナロジーという、身をもって経験させること、ないしは、そうした経験へとさしむけることによる示唆の技法が存在している。

以上のことから、生の実践知 を世代間で継承し、次世代の人びとの成長・成熟や生成変容を促そうとする過程には、実証科学的に説明可能な合理的な知に回収されないような技法、具体的には、モノを媒介としたり、例示や比喻、寓話やアナロジーを駆使したりといった、身をもって経験させる(それを促す)という技法が存在することが明らかとなった。もちろん、そうした技法のすべてが人間の成長・成熟や生成変容を生起させるわけではなく、また、教育にかかわるわけでもない。では、いかなる原理において作用する時、そうした技法は人間の成長・成熟、そしてまた生成変容を生起させ得るのだろうか。さらに、そうした技法を介した行為が教育と呼ばれ得るのは、いかなる条件のもとにおいてなのだろうか。これらの問題は、重要であるにもかかわらず、必ずしも十分には問われてきていない。そこで今後は、教育や人間形成にかかわる諸思想の系譜を辿り直し、従来の近代教育学が追求してきた実証科学的に説明可能な evidence-based な知に回収されない、モノによる媒介や例、アナロジー等の技法を用いて示すしかないような 生の実践知 が、人間の成長・成熟や生成変容、そして教育といかなる連関にあるのかをさらに解明していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 11 件)

岡部美香、北詰裕子、室井麗子、高橋舞、
例示 / 例外の政治学、教育哲学研究、査
読無、115号、2017、印刷中

高松みどり、生の実践知はどのように継
承されるのか 茶礼のパフォーマンスに
着目して、奈良女子大学・教育システ
ム研究、査読無、12号、2017、41 52

盧珠妍、生の実践知 継承に関する研究
韓国伝統儀式祭祀(チェサ)・茶礼(チ
ャレ)を音 という観点から、奈良
女子大学・教育システム研究、査読無、
12号、2017、35 40

OKABE, Mika, Towards Thinking Not
Modelled on the 'External' :
Discussion of Alternative Thinking
within Research on Japanese Philosophy
of Education, English E-Journal of the
Philosophy of Education, 査読無, 1,
2016, 50 58

岡部美香、外 を形象らない思考へ、教
育哲学研究、査読無、113号、2016、1
7

池田華子、高松みどり、盧珠妍、生の実
践知 継承に関する日韓比較研究 地蔵
盆と茶礼のフィールドワークを通して、
天理大学・総合教育研究センター紀要、
査読無、14号、2016、39 53

岡部美香、人間と教育への問いとしての
公害教育、環境教育、査読有、25 巻 1 号、
2015、60 69

室井麗子、「古典」創出と翻訳 ルソー『エ
ミール』の邦訳史を通して見た教育(哲)
学形成、教育哲学研究、査読無、111
号、2015、13 18

岡部美香、モノ語りを編む、教育哲学研
究、査読無、109号、2014、99 101

岡部美香、高橋舞、盧珠妍、教育関係論・
学び論から世代継承のメディア論へ 日
韓の教育思想史研究は世代継承の実践知
をどのように論じ、発信してきたか、
近代教育フォーラム、査読無、23号、2014、
249 257

岡部美香、教育人間学にとって政治とは
何か、近代教育フォーラム、査読有、23
号、2014、57 66

〔学会発表〕(計 6 件)

OKABE, Mika, The Position of Human

Beings in Kinji IMANISHI 's The World
of Living Things (Seibutsu no Sekai):
A Educational-anthropological Study
of Human Approach to the Environment,
The 46 Annual Conference of the
Philosophy of Education Society of
Australasia, 2017年12月10日、Warwick
Hotel, Coral Coast, Fiji

MUROI, Reiko, Formation of Philosophy
of Education in Japan: What we can say
from the Perspective of Translation
History of Rousseau's Emile into
Japanese, The 46 Annual Conference of
the Philosophy of Education Society of
Australasia, 2017年12月11日、Warwick
Hotel, Coral Coast, Fiji

岡部美香、北詰裕子、室井麗子、高橋舞、
例示 / 例外の政治学、教育哲学学会第 59 回
大会、2016 年 10 月 10 日、東京大学

高松みどり、盧珠妍、生の実践知 継承
に関する日韓比較研究 茶礼のフィール
ドワークを通して、臨床教育人間学会
第 17 回カンファレンス、2016 年 9 月 22
日、横浜国立大学

岡部美香、外 を形象らない思考へ、教
育哲学学会第 58 回大会(招待講演)、2015
年 10 月 10 日、奈良女子大学

高橋舞、戦争に抵抗する「戦争の記憶」
継承に学校が果たす役割 戦争記憶空間
および戦争記憶空間を修学旅行先とする
学校へのフィールド調査を通して、日
本教育学会第 74 回大会、2015 年 8 月 29
日、お茶の水女子大学

〔図書〕(計 1 件)

岡部美香 他、北樹出版、子どもの教育と
未来を考える、2017、印刷中。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡部 美香 (OKABE, Mika)
大阪大学・人間科学研究科・准教授
研究者番号: 8 0 2 9 4 7 7 6

(2) 研究分担者

森(高松) みどり
(MORI (TAKAMATSU), Midori)
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 2 0 6 2 6 4 7 8

盧 珠妍 (RO, Juyeon)

奈良女子大学・教育システム研究開発センター・特任助教
研究者番号：10724239

下司（北詰） 裕子（GESHI (KITAZUME), Yuko）
東京学芸大学・教育学部・講師
研究者番号：30580336

高橋 舞（TAKAHASHI, Mai）
帝京平成大学・ヒューマンケア学部・講師
研究者番号：50735719

室井 麗子（MUROI, Reiko）
岩手大学・教育学部・准教授
研究者番号：40552857
（平成26年8月6日より、研究分担者として参加）

池田 華子（IKEDA, Hanako）
天理大学・人間学部・講師
研究者番号：20610174
（平成28年3月16日まで、研究分担者として参加）